令和5年度　陵南中学校　学校評価

1　学校教育目標　　こころ豊かに、自ら考え、行動する生徒の育成　～生徒に寄り添い、対話を重視する教育の実践～

2　本年度指導目標

1. 生徒・保護者・地域が誇りにできる学校づくりの推進
2. 道徳・人権教育を基盤に、一人ひとりが認められ大切にされる教育活動の推進
3. 指導力と資質の向上を図るため、自己研鑽に励む教師の育成
4. 自他の命を大切に、こころと身体を鍛え、健康で元気に生活する生徒の育成
5. ICTの活用、個別最適な学びの充実等を通して、確かな学力を育む授業実践

3　学校自己評価と改善の方策　　（A:できている　B:だいたいできている　C:あまりできていない　D:できていない）

努力項目	評価項目(具体的な実践目標)	生徒アンケートNo	保護者アンケートNo	達成状況(自己評価)	改善の方策
1. 学習指導の充実	基礎・基本の確実な定着	1	1	B	○14%の生徒が理解できていないことを意識して授業を進める。 ○ドリルパークを年間を通して、教科指導と関連づけながら活用したり、朝学習の時間などに各自のペースで進めたりすることができるように考える。 ○生徒に「わかった」と思わせることができるような発問や「これからも頑張ろう」と思うことができる評価を心がける。
	ICTの効果的な活用	2		B	○生活ノートや健康チェック、翌日の連絡用など、使用用途を広げる方向で考えていく。 ○ICTの活用には改善が見られたが、更なる活用の推進のため、教員のICTを活用した授業づくりとあわせて、生徒が自らの学びにICTを活用する場面を設定する取り組みを推進する。 ○ICT活用に関するミニ研修を計画的に継続して実施したり、全員がICTを活用した授業を年に1回は行ったりするなどの取り組みを目指す。
	主体的学習態度の育成	3	2 3	B	○授業後に自主的に調べたくなるような興味を持たせる授業を展開できるよう工夫する。 ○「基礎基本の定着」と「主体的学習態度の育成」は相反する面があるが、生徒のニーズに合わせて授業をコントロールしていきたい。 ○宿題の量を適切にする。 ○教科の枠にとらわれず、単元の学習に関係の深い内容を掘り下げてみる。 ○教員自らが楽しみながら、授業の中でその教科の面白さを生徒と共有できるようにする。
2. 生徒理解に基づく生徒指導	生徒に寄り添う指導と信頼関係の確立（アセスと教育相談の効果的な活用）	4		B	○アセスの実施時期を学年によって変える　→必要な時期にすることでより的確なデータをとることができ、生徒の対応に生かせる。 ○別室での個に応じた対応の充実　→様々な課題を抱える生徒を1つの部屋にするのではなく、スペースを区切るなどしてみるとより落ち着いて過ごすことができると考える。 ○生徒の情報共有を確実に行う　→ドライブやスズキ校務で生徒の情報を共有することで、抜けもれなく誰でも一律に対応ができるようにする。4月当初の情報共有の仕方を工夫する。顔写真のデータを共有できるようにする。
	望ましい生活習慣の確立と規範意識の高揚	6 12	4 5	B	○専門家による講演の機会を設ける(SNS・生活習慣)　→生徒だけでなく、保護者も一緒に聞けるようにする。 ○保健だよりや生活チェックシートを継続して活用できるように声掛けを行う。
	自主的な生徒会活動との連携	7		A	○学校全体で協力して取り組んだことが、目に見える形で表れるような取り組みを考える。 ○地域に出る活動を行う(清掃などの奉仕活動)　→自分たちの取り組みがより多くの人に伝わることで、実践の意欲なども高まることが期待できる。
	励まし、支え、認め合う学級づくり	8 10 15	6	B	○若手教員とベテラン教員の関わりを密にする。　→若手教員がベテラン教員から授業や学級経営のノウハウを学ぶ機会を持つ。 ○他のクラスや他学年の様子が見られるようなシステムを、学校全体で作る。→新たな発見や自己研鑽の機会にする。 ○資料のデータ化(学級通信、道徳指導案など)　→誰でもすぐに見ることができて、参考にしたり実践したりできるようにする。 ○不登校対応の実践例の共有　→様々な取り組み方を知ることで、より充実した対応ができるようにする。
3. 道徳・人権教育の充実	心に響く道徳教育の充実	9	7	B	○教員自身が人権感覚を磨く努力を怠らない。→情報収集・自己研鑽・研修・プレ授業での検討会など。 ○道徳の授業が計画的に行えるよう、行事計画の工夫が必要である。 ○ルールやマナーの遵守を目標とした授業を効果的に行う。
	一人ひとりを大切に、互いに認め合う人権教育の拡充	10 15		B	○生活ノートやアンケート、教育相談の場が気づきにつながっている。このような機会を有効に活用していく。 ○教育相談で担任が個別に話を聞く時間に、生徒たちから不安やSOSを伝えられることがあった。そのためにも、時間的な余裕は必要である。 ○普段から生徒が話しやすい雰囲気や関係性をつくっていきたい。 ○他人事と捉えず、自分事と捉えて考えられるような指導を継続していく。
	豊かなこころを育てる体験活動・行事への取り組み	11	8 9	B	○行事の精選は継続していく。精選が難しければ、計画的に配置し、時期をずらす。具体的には、体育大会の時期の変更はよかった。文化発表会、合唱コンクールなどが重なった11月については内容・時期等、検討すべきである。 ○今回はクロームブックでの集計のみになったが、回収率が低かった。行事とアンケートの時期にずれがあったことが影響している可能性が考えられるため、計画的に実施する必要がある。
4. 生きる力を育む教育の推進	安全指導（校内、校外、登下校）の徹底	12	5	B	○学校だけではなく、家庭や地域と連携して指導を徹底する。 ○交通ルール指導を引き続き徹底する。
	防災教育等、危機管理意識の高揚	13 14	10	B	○総合的な学習の時間、校外学習などを利用し、年間を通じて定期的な指導を行う。 ○避難訓練だけではなく、防災グッズの作成など、より具体的な体験活動を実施する。 ○学ぶ・知るだけではなく、実際に行動（防災・減災）に移せるよう指導する。
	個を生かす特別支援教育の充実			B	○特別支援教育に関わるサポート体制を充実させる。 ○個に応じた応じた指導をより充実させる。 ○特別な支援を要する生徒についての共通理解を深めつつ、計画的な学習に取り組ませる。
	自己実現を目指したキャリア教育の充実	17	11	B	○キャリアノート、キャリアパスポート等を活用する。 ○様々な職業の方（卒業生など）の話を実際に聞く機会を設ける。 ○日々の授業や生活の中でも、キャリア教育を意識して指導を行う。
	食育の推進	18		B	○給食指導を通じて、食に対する理解を深め、興味を持たせる。 ○給食関係の配布物を活用するなどし、家庭への働きかけをすすめたい。 ○生徒・保護者の意識をさらに高めるためにも、食に関する講演会等を企画する。
	家庭・地域と連携した、安全・安心な学校づくりの推進 （学年通信・HP等の充実）	19 20	12	A	○引き続き、スクリレ・HP等を活用し、家庭・地域との共通理解を図っていく。
5. 研修活動の充実	実践的指導力向上のための研究と修養に励む(授業の研究や準備時間の確保)			B	○「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて校内研修や研究授業を活性化させ、教員同士の学び合いやチームとしての研修を推進する。 ○ICTやスクールサポートスタッフ等の積極的な活用により校務の効率化を図り、必要な時間の確保に努める。
6. 仕事と生活	業務改善への取り組み(仕事と自身の生活の調和)			B	○ウェルビーング向上委員会による検討等を通じて、教職員が自ら業務改善に向けた提案と実践ができる機会を設ける。 ○業務の役割分担・適正化を確実に実施するために削除する業務の洗い出しや分担の見直しを進める。 ○勤務時間適正化に向け、先進的事例の共有や啓発を通じて教職員の意識改革を図る。

4　学校関係者評価

努力項目	達成状況	自己評価の適切さ（関係者評価）
1. 学習指導の充実	A	家庭学習の取り組み状況が、学年によって差があることが気になったが、学習コンテンツであるドリルパークを活用した取り組みを実施するなど、1人1台端末を活用した取り組みが行われたことは評価できる。
2. 生徒理解に基づく生徒指導	A	学校の取り組みを聞くと、よく取り組んでいただいていると感じる。また、困ったときに教師に相談できる生徒が多いのは素晴らしいことであると思う。不登校生の割合が増えていることは気になるが、引き続きSSTプログラムを実施するなど対策を講じていただき、今後も十分な生徒理解に努めてほしい。
3. 道徳・人権教育の充実	A	人権フェスティバルの感想を見ると、生徒たちは素直で、様々な人権課題に対しても柔軟に受け入れることができていると感じる。これからは多様性の時代であり、道徳や人権教育が重要であると考える。その充実のためには先生方のスキルアップも必要であるため、引き続き自己研鑽に努めていただきたい。
4. 生きる力を育む教育の推進	A	震災を経験していない子どもたちに防災意識を養うことは難しい面もあると思うが、実践事例等を参考にしながら防災教育の充実を図ってほしい。また、学校の情報発信については、メディアを使って積極的に行うことができており、評判も良いので引き続き継続していただきたい。
5. 研修活動の充実	A	技術の発達や教育ニーズの多様化により、先生方も大変であると思う。それらに対応していくためには、新しいスキルも必要になるので、今後も研修等によるスキルアップに努めていただきたい。
6. 仕事と生活	A	学校に求められる業務が多岐に渡り、負担が増加しているように感じる。多くの業務があるが、教職員が一人で抱え込まないようにチームで対応するとともに、ICTを積極的に活用したり業務の見直し等を行ったりしながら、業務改善が進むように引き続き取り組んでいただきたい。